

杉原 百合子

同志社大学大学院総合政策科学研究科総合政策科学専攻 博士後期課程

認知症患者と家族の告知に関する希望と関連要因の研究

QOL 向上のためのインフォームドコンセント

本研究は、認知症患者本人の病状認識の検討と、患者家族の告知に対する意向に関連する要因の検討を目的とした。調査はまず、京大病院もの忘れ外来通院中の認知症患者の病状認識を調べ、同時に患者の認識に対する家族の推察と告知についての意向を調べた。次に、同外来初診患者家族に対して、告知についての意向を調べた。最後に、同外来通院中の患者家族に対して聞き取りを行い、告知の意向に関連する要因について検討した。その結果、認知機能障害の程度で病状認識に差がみられ、認知機能障害が軽度であれば、洞察力が残存している可能性が示唆されたが、能力低下を疾患と結び付けて洞察することは難しいと思われた。通院中患者家族への調査では、告知に肯定的な家族が1割で否定的な家族が7割であったが、初診患者家族への調査では4割の家族が告知に対して積極的な態度を示し、聞かせたくないとの意思表示をした家族は皆無であり、両調査間に違いがみられた。患者家族への聞き取りにより、告知に影響する要因として「自覚欠如による拒絶」「先入観による恐怖や不安」「対処を考えられる」「できる間にしたいことがある」「迷う気持ち」「精神面への配慮」の6つが抽出された。